

大学生の友人関係におけるLINEの利用：自己開示の深さおよび効用認知に注目して

著者	西村 洋一
雑誌名	聖学院大学論叢
巻	第32巻
号	第2号
ページ	127-141
発行年	2020-03-15
URL	http://doi.org/10.15052/00003723

〈原著論文〉

大学生の友人関係における LINE の利用⁽¹⁾ ——自己開示の深さおよび効用認知に注目して——

西 村 洋 一

抄 録

本研究では、現代青年の友人関係における LINE の位置づけを探るべく、調査を実施した。特に LINE 利用における自己開示の深さと効用認知という観点に着目した。また、友人関係には複数の類型があるという知見にもとづき、関係を回避しがちな友人関係を持つ青年が、他の類型の青年に比べて LINE でどの程度の自己開示を行っているのかということにも焦点をあてた。大学生 ($n=302$) を対象に Web 調査を行った。友人関係尺度についてのクラスター分析の結果から、現代青年の友人関係のあり方を 3 群に分割した。LINE における自己開示の深さと効用認知について 3 群の比較を行ったところ、関係回避群は他の群に比べて、深い自己開示がなされておらず、LINE に対しては束縛感や不快感を強く認識していた。これらの結果より、LINE の利用は青年の友人関係における独自のコミュニケーションの場を提供しているわけではなく、オフラインでの友人関係のあり方が反映されたものであるということが示された。

キーワード：LINE, 自己開示の深さ, 友人関係, LINE の効用認知

I 問題と目的

青年にとって友人関係は重要な位置づけにある。友人関係は人生を通して社会化や心理的幸福感をもたらすものである (Hartup & Stevens, 1997)。また、松井 (1990) は青年にとって友人関係は「安定化機能」「社会的スキルの学習機能」「モデル機能」といった役割を持つことを指摘しており、その重要性が理解される。

それでは、友人関係の形成や維持に必要となる要因はどのようなものがあるだろうか。岡田 (2008) は、動機づけを踏まえた友人関係の形成・維持のモデルの中で、援助行動、会話の開始、自己開示、協同的な問題解決を友人関係行動として位置づけており、親密な友人関係と動機づけとの間で循環的に親密化がなされることを示している。その中で自己開示は対人関係の親密化において重要な要

因として取り上げられることが多い⁽²⁾。また、自己開示が青年の適応などに寄与することを示す知見もあり（例えば、小野寺・河村，2002）、青年の自己開示のあり様を検討することは重要である。

現代青年の友人関係の形成・維持は対面だけでなされるわけではなく、ソーシャルメディアとしてのインターネットは欠かせないものであろう。実際、ソーシャルネットワークワーキングサービス（サイト、以下 SNS と呼ぶ）の利用は、それが日本社会で普及され始めた当初から青年が積極的に利用している様が観測されており、平成 30 年の『情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査』にもそのことが表れている（総務省情報通信政策研究所，2019）。実際にソーシャルメディアが現代青年の友人関係の中でどのように利用されているのか、実証的に検討していくことがその理解のためには必要である。

そこで、本研究ではソーシャルメディアの中でも特に「LINE」⁽³⁾を取り上げ、現代青年の友人関係、そしてその重要な要因としての自己開示とどのようなかかわりがあるのかを探ることを目的とする。LINE はソーシャルメディアの中で日本では比較的多く利用されており、その利用率は 10 代で 88.7%、20 代で 98.1% となっている（総務省情報通信政策研究所，2019）⁽⁴⁾。LINE はソーシャルメディアの中ではインターパーソナルなものと分類され、情報発信や相互作用する相手が限定された比較的クローズドなメディアとされる（鈴木・遠藤・神野・松下・安岡・新島，2015）。つまり、一般的な SNS とは異なり、既知の他者とのコミュニケーションのために用いられることが多い。本研究でもこのようなメディアの性質を含め、親しい友人関係における LINE の位置づけを探求する。

現代青年の友人関係

現代青年の友人関係に対しては、「希薄化している」「選択化している」などの主張がなされ議論が続いている。しかし、現代の青年が一律に変化したというわけでは必ずしもないであろう。例えば、岡田（1993，2007a）は、現代青年における友人との付き合い方のパターンを分類している。その結果、友人との間で楽しさばかりを求め「群れる」群、友人との深いかかわりを「回避」しようとする群などが見いだされたが、少数の友人と深い関係を望む「個別関係群」（いわゆる伝統的な青年の人間関係のパターン）も一定の割合存在することを示している。そこで本研究では、友人関係の類型から LINE の利用、そしてそこで行われる自己開示の様相について検討を行う。

青年のインターネット、ソーシャルメディアの利用と友人関係

青年がインターネットをする中で友人関係を含む対人関係にどのような影響が見られるかについての検討は多くなされている。その中で、特に従来から多く利用され、LINE などのモバイルインスタントメッセージ（mobile instant messenger，以下、MIM と呼ぶ）⁽⁵⁾と利用目的などで類似点の多い携帯メールの利用に関する研究を見ていく⁽⁶⁾。

携帯メール利用は友人関係を含めた身近な既存の人間関係を強化するよう作用することが示されている（古谷・坂田, 2006; Hall & Baym, 2011; Igarashi, Takai, & Yoshida, 2005; 小林・池田, 2005）。このような友人関係の強化に寄与する程度は, SNS やオンラインゲームなど他のソーシャルメディアよりも効果が大きい（Liu & Yang, 2016）。さらに, Igarashi et al. (2005) では, 特に女子大生において, 大学入学後からのネットワークの拡大にも寄与することが示されている。また, 大学入学後の携帯メールによるネットワークの変化（例えば, 入学後における友人への送信数の増加）により孤独感の低下が見られた（五十嵐・吉田, 2003）。ただし, 携帯メール利用のような非対面的なコミュニケーションに従事することには, 青年の対人関係に希薄化をもたらすという懸念も論じられることがある。それに対して, 携帯メール利用を多く行う高校生が必ずしも希薄な関係の友人が多いというわけではないこと（赤坂・高木, 2005; 赤坂・坂元・高木, 2007）、さらに, 長期的な携帯メールの利用は友人の選択化にもつながらず, 全般的な友人を志向することにつながるという知見もある（Matsuo, Onishi, Ando, & Sakamoto, 2009）。

LINE を直接的に取り上げ, 友人関係との関連を検討した研究は必ずしも多くないが, いくつかの知見は得られている。黒川・吉田（2016）では, 大学新入生の対面, および LINE のグループに着目し, そのネットワークの類似性や時間的な変化, 友人関係満足度や精神的健康との関連を検討している。対面でのネットワークと LINE でのネットワークは類似しており, 関係形成の比較的早い段階においては LINE へのアクセスと友人関係満足度との間に正の関連が見られた。時岡他（2017）では高校生の LINE でのやりとりに対する認知と本研究でも取り上げる友人関係の特徴との間の関連を検討している。LINE でのやりとりに対する認知については, 「既読無視への不安」は「気軽さ」など 6 因子が得られた。友人関係の特徴との関連については, 「傷つけられることへの回避」が LINE に対するそれぞれの認知について比較的強い関連を示した。

本研究では, 友人関係におけるインターネット上での自己開示に焦点をあてている。インターネットのようなメディアにおけるコミュニケーションと自己開示の関係については数々の検討がなされており, インターネット, あるいはコンピューターを介したコミュニケーション (computer-mediated communication, 以下 CMC) における特に視覚的匿名性の高い状態でのコミュニケーションにおいては, 自己開示の比率や中程度の親密度の自己開示が展開されやすいことが示されている (Joinson, 2001; Tidwell & Walther, 2002)⁽⁷⁾ また, 携帯メールでの自己開示は対面での自己開示を土台として友人との関係の親密さに寄与する (古谷・坂田・高口, 2015)。この点は MIM も同様である。ネガティブ, ポジティブの両方の感情をコミュニケーションの中で表現することを適切とする規範は他のソーシャルメディアよりも受容されている (Waterloo, Baumgartner, Peter, & Valkenburg, 2018)。さらに, MIM による自己開示は友人関係維持行動へと関連し (Abeel, Schouten, & Antheunis, 2017), 自己開示がソーシャルサポートを受けることにつながり, 対面と MIM 両方の自己開示を促すという循環が生じることも示されている (Trepte, Masur, &

Scharkow, 2018)。

対面状況における自己開示については、効果量は大きくないものの性差の存在が指摘されている (Dindia & Allen, 1992)。また、特に他者とかかわるインターネット利用は男性よりも女性の方が積極的に行っているという知見もある (西村・遠藤, 2010)。そのため、本研究でも LINE の利用において性差が見られるのかについても検討を行う。

本研究の目的

上述の先行研究を踏まえると、LINE というメディアも現代青年の友人関係においてその形成・維持に寄与していることが考えられる。そして、そこには自己開示が重要な役割を果たしているであろう。しかしながら、実際に LINE を利用する中で青年がどのような自己開示を行っているかは把握されていない。そこで、本研究において、まずは LINE において行われている自己開示の状況を調べることにする。その際、LINE における自己開示の中でも特にその深さに着目して検討を行う。はじめに述べたように、友人関係が親密になる際に自己開示は不可欠であるが、自己開示はその幅、深さ、あるいは頻度 (比率) といった観点から検討されることが多い。その中で深さは親密な関係を考える上で重要である (Altman & Taylor, 1973)。特に、友人と親密になることを回避するような関係を構築する青年においては、自己開示が少ない、あるいは親密な深い自己開示が行われにくいことが考えられるが、メディアによる効果により、自己開示のあり様が変わってくるのが注目される。ただし、LINE の相手は既知のオフライン場面でも出会う相手とのコミュニケーションが多く、そのような関係の中で展開される自己開示はどのようなものになるのかは明確な予測は困難である。自己開示という観点から、LINE は現代青年において通常の友人関係のあり様と同様の利用のされ方をされているのか、それともメディアに特徴的な利用がされているのかを検討することが本研究の目的の1つである。

さらに、本研究では、友人関係のあり方によって LINE に対してどのような効用を認識しているのかという点も検討を行う。利用と満足研究の観点を援用すれば、青年がメディアに対して抱く効用がメディアの利用の仕方と関連することが予測されるためである。これらの検討により、LINE が現代青年においてどのように位置づけられるか、その一端が明らかになることが期待される。

II 方法

調査対象

調査対象は LINE の利用が活発な年代として、大学生男女とした。インターネット調査会社のモニターに対しスクリーニング調査を実施し普段 LINE を利用していると回答した大学生男女に本調査への回答を求めた。回答は 310 名から回答が得られた。そのうち、LINE の利用時間について極

端に長い時間を報告した 8 名を分析から省くこととした。そのため、302 名（男子：151 名，女子：151 名）が分析対象となった。なお，本調査の実施に際して，調査のはじめに回答は強制されないこと，いつでも回答を中止できることを明記した。

調査内容

自己開示の深さを測定する尺度 現代日本の若者による自己開示の深さを測定するために丹羽・丸野（2010）作成された尺度を用いた。自己開示の深さとして「趣味」「困難な経験」「決定的でない欠点や弱点」「否定的性格や能力」の 4 段階が設定されている。本研究では，丹羽・丸野（2010）で設定されたのと同様に「すでに仲は良いがこれから親しくなりたいと思っている同性の友だち」と LINE で会話をする場面において，それぞれについてどのくらい話をしているかを回答してもらった。丹羽・丸野（2010）では 24 項目が取り上げられているが，本研究では 4 つ下位尺度ごとに 3 項目ずつ計 12 項目を用いることとした。「何も話さない」(1) から「十分に詳しく話す」(7) の 7 件法で回答を求めた。

LINE 利用の効用認知 五十嵐・吉田（2003）による携帯メールの効用認知尺度もとに作成した。項目内で「携帯メール」とある部分を「LINE」に変更し，LINE の利用状況に適合するように表現を改めた。さらに「LINE を使うことで友だちとトラブルになりやすい」，「LINE での友だちとのやりとりの中で友だちに対し不快に感じることもある」，「LINE でのやりとりで疲れることがある」，「LINE ではスタンプを使うことで自分の気持ちをうまく伝えることできる」といった LINE 特有の項目を 4 項目追加した上で調査に使用した。20 項目について，「まったくそう思わない」(1) から「非常にそう思う」(5) の 5 件法で尋ねた。

友人関係尺度 現代青年に特有な友人関係のあり方を把握するために岡田（2005）において用いられた尺度を使用した。岡田（2005）で「自己閉鎖」「軽躁的關係」「侵入回避」「傷つけられ回避」の 4 因子に高い負荷量を示した 29 項目を採用した。「まったくあてはまらない」(1) から「とてもあてはまる」(6) の 6 件法で尋ねた。

LINE およびインターネット利用状況 LINE については，登録している友人の数と参加しているグループの数の回答を求めた。他にインターネット利用歴，利用時間を尋ねた。

Ⅲ 結果

各使用尺度の検討

まず，自己開示の深さを測定する尺度について，各項目の分布を確認し，丹羽・丸野（2005）の手続きと同様に 4 つの下位尺度ごとにクロンバックの α 係数を算出した。「趣味」が $\alpha = .83$ ，「困難な経験」が $\alpha = .91$ ，「決定的でない欠点や弱点」が $\alpha = .84$ ，そして「否定的性格や能力」が $\alpha = .87$

であった。下位尺度ごとに項目得点の平均を算出し、それぞれの得点とした。

LINE 利用の効用認知については、項目内容の変更や追加があったため、探索的因子分析を実施した。平行分析の結果を参照して 3 因子が妥当と判断し、最尤法による因子抽出、プロマックス回転を行った。因子負荷量 .40 以上を採用基準としたが、基準に満たない項目が 1 項目あったため、削除の上再度因子分析を実施した。その結果、第 1 因子は「利便性」(8 項目)、第 2 因子は「親和充足」(6 項目)、そして第 3 因子は「束縛感・不快感」(5 項目)の因子と解釈した。それぞれの項目を用いてクロンバックの α 係数を算出したところ、利便性は $\alpha = .83$ 、親和充足は $\alpha = .84$ 、束縛感・不快感は $\alpha = .74$ であった。因子ごとに項目の平均を算出し、それぞれの得点とした。

友人関係尺度については、岡田 (2005) の因子分析の結果に従い項目得点を合計して、4 つの因子の得点とした。

変数間の関連について

各変数間の相関係数の算出を行った。友人関係尺度の下位尺度と自己開示の深さとの関連については、自己閉鎖がどのレベルの自己開示の深さでも負の有意な相関を示した ($r = -.13 \sim -.26$)。また、侵入回避も趣味以外のレベルの自己開示と有意な負の相関が示された ($r = -.17 \sim -.26$)。軽躁的關係は趣味のレベルと有意な正の関連、傷つけられ回避は有意な関連は見られなかった。

友人関係尺度の下位尺度と LINE の効用認知との間では、自己閉鎖が利便性、親和充足と有意な負の相関、束縛感・不快感とは正の相関を示した。傷つけられ回避は LINE の効用認知の各因子といずれも低い有意な正の相関を示した。

Table 1 自己開示の深さ、LINE の効用認知、および友人関係の相関

	自己開示の深さ				LINE の効用認知		
	趣味	困難な経験	決定的ではない欠点や弱点	否定的な性格や能力	利便性	親和充足	束縛感・不快感
利便性	0.26***	0.27***	0.25***	0.23***	-	-	-
親和充足	0.16**	0.35***	0.34***	0.36***	-	-	-
束縛感・不快感	-0.04	0.02	0.02	0.06	-	-	-
自己閉鎖	-0.13*	-0.26***	-0.26***	-0.24***	-0.27***	-0.15	0.21***
軽躁的關係	0.21***	0.02	0.05	-0.06	0.25***	0.08	-0.06
侵入回避	0.08	-0.22***	-0.17**	-0.26***	-0.01	-0.11	-0.01
傷つけられ回避	0.08	0.01	0.05	0.04	0.12*	0.17**	0.12*

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

友人関係のあり方ごとの LINE における自己開示の深さと LINE 利用の効用認知の差

次に現代青年の友人関係のあり方についてタイプ分けを行うために、友人関係尺度の下位尺度得点を指標とし、平方ユークリッド距離を用いたクラスター分析（Ward 法）を行った。各群の友人関係尺度の下位尺度について平均得点を算出し（Table 2）、群を要因とした一要因の分散分析を実施した。自己閉鎖は群の主効果が有意であり（ $F(2, 299) = 84.75, p < .001, \eta_p^2 = 0.36$ ）、多重比較の結果、クラスター 1、クラスター 3、クラスター 2 の順に有意に差が見られた。軽躁的關係も有意な差が見られた（ $F(2, 299) = 78.27, p < .001, \eta_p^2 = 0.34$ ）。多重比較の結果は、クラスター 2、クラスター 1、クラスター 3 の順に有意な差があるという結果であった。侵入傾向も有意であった（ $F(2, 299) = 66.39, p < .001, \eta_p^2 = 0.31$ ）。多重比較の結果、クラスター 1、クラスター 2、クラスター 3 の順に有意に差が見られた。傷つけられ回避も群の主効果が有意であり（ $F(2, 299) = 83.45, p < .001, \eta_p^2 = 0.36$ ）、多重比較ではクラスター 1、クラスター 2、クラスター 3 の順に有意な差があるという結果であった。

クラスター 1 は自己閉鎖、侵入回避、傷つけられ回避の得点が高く友人との関係を避ける傾向が強い。そのため「関係回避群」と解釈された。クラスター 2 は軽躁的關係が正の値を示し、自己閉鎖や傷つけられ回避は低く、侵入回避は平均よりもやや高いという傾向が見られた。友人との円滑な関係を指向するものと解釈され、「群れ指向群」と命名した。クラスター 3 は全体に低い得点を示しており、回避をすることもないが軽い付き合いも行わないという指向が読み取れる。そのため、「個別關係群」と解釈を行った。これらの結果は、岡田（2007b）と同様の傾向を示しており、ク

Table 2 各クラスターにおける友人関係尺度の下位尺度得点

	クラスター 1 (n=157)	クラスター 2 (n=79)	クラスター 3 (n=66)
自己閉鎖			
M	36.81	27.42	31.35
SD	5.42	5.22	5.48
z	0.54	-0.85	-0.27
軽躁的關係			
M	24.79	28.19	19.53
SD	4.79	3.00	3.73
z	0.05	0.71	-0.98
侵入回避			
M	24.79	28.19	19.53
SD	4.79	3.00	3.73
z	0.37	0.13	-1.03
傷つけられ回避			
M	35.80	34.53	28.38
SD	4.43	4.13	4.78
z	0.53	-0.29	-0.93

ラスターの命名は岡田（2010）に従った⁽⁸⁾。

次に、友人関係の群と性別によるLINEでの自己開示の深さの違いを検討するため、自己開示の深さの各段階を従属へ数として、友人関係の群（3）×性別（2）の2要因の分散分析を行った（Figure 1）。趣味の自己開示については、いずれの効果も有意ではなかった。困難な経験については、友人関係の群の主効果のみが得られた（ $F(2, 296) = 6.62, p < .01, \eta_p^2 = 0.04$ ）。関係回避群よりも群れ指向群と個別関係群の方が有意に高い得点を示した。次に決定的ではない欠点や弱点については、友人関係の群の主効果のみが得られた（ $F(2, 296) = 5.10, p < .01, \eta_p^2 = 0.03$ ）。関係回避群に比べて、群れ指向群と個別関係群が有意に得点が高いという結果であった。最後に、否定的な性格や能力については、友人関係の群の主効果と性別の主効果が有意であった（友人関係の群の主効果： $F(2, 296) = 5.33, p < .001, \eta_p^2 = 0.03$ ；性別の主効果： $F(2, 299) = 5.30, p < .05, \eta_p^2 = 0.02$ ）。友人関係の群の主効果については、関係回避群に比べて、群れ指向群と個別関係群が有意に得点が高いという結果であった。性差については、男性の方が女性よりも有意に高い得点を示した。

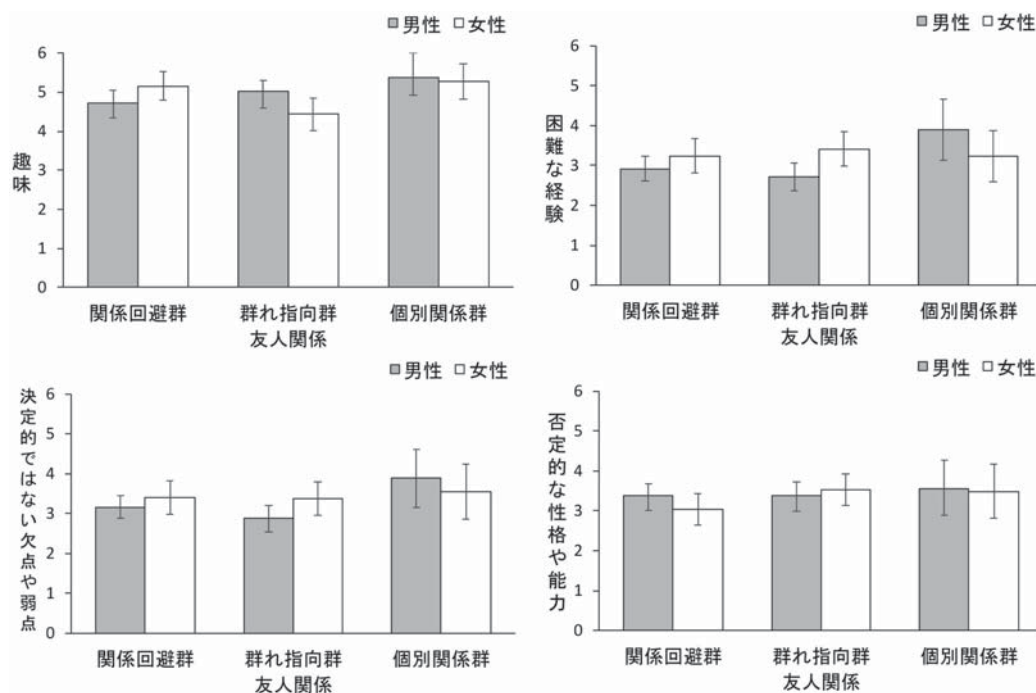


Figure 1. 友人関係各群の自己開示の深さの平均得点（エラーバーは95%信頼区間）。

次に、LINEの効用認知を従属変数として同様の2要因の分散分析を実施した。利便性については、友人関係の群と性別の主効果が有意であった（友人関係の群の主効果： $F(2, 296) = 4.18, p < .05, \eta_p^2 = 0.03$ ；性別の主効果 $F(2, 296) = 3.98, p < .05, \eta_p^2 = 0.01$ ）。群れ指向群が関係回避群や個別関係群よりも有意に高い得点を示した。性差については、女性の方が男性よりも有意に高い得点を示

した。親和充足については、いずれの効果も有意ではなかった。最後に束縛感・不快感については友人関係の群の主効果が有意であり ($F(2, 296) = 6.36, p < .01, \eta_p^2 = 0.04$)、群れ指向群よりも関係回避群が有意に高い得点を示しており、個別関係群はどちらの群とも有意な差が見られなかった。

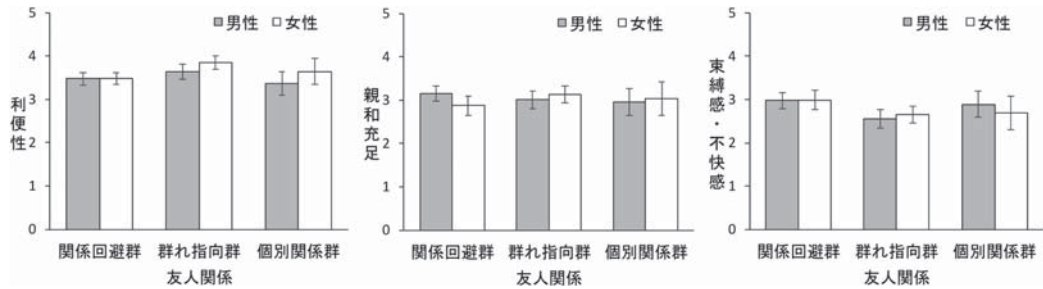


Figure 2. 友人関係各群の LINE の効用認知の平均得点 (エラーバーは 95%信頼区間)。

友人関係のあり方ごとの LINE の利用状況

本研究では、LINE の利用状況として、LINE に登録している「ともだち」の数、参加しているグループ数、LINE の 1 週間あたりの利用日数、LINE の 1 日あたりの利用時間を尋ねている。各群の平均と標準偏差を Table3 に示した。自己開示の深さや効用認知と同様に 2 要因の分散分析を行ったが、有意な効果はいずれも得られなかった。

Table 3 友人関係各群の LINE の利用状況の平均と標準偏差

	性別	関係回避群	群れ指向群	個別関係群
LINE のともだちの登録数	男性	107.59 (86.97)	109.83 (100.19)	111.31 (63.28)
	女性	112.53 (91.93)	136.84 (140.94)	142.71 (87.84)
LINE の参加グループ数	男性	10.8 (14.52)	13.35 (13.6)	11.51 (9.43)
	女性	12.57 (9.88)	13.5 (11.26)	14.24 (9.57)
LINE 利用日数	男性	6.53 (1.03)	6.83 (0.65)	6.84 (0.47)
	女性	6.64 (0.84)	6.73 (0.67)	6.71 (0.96)
LINE 利用時間	男性	2.08 (2.39)	3.12 (3.51)	2.74 (2.98)
	女性	2.37 (2.63)	1.95 (1.72)	3.01 (2.78)

注) 括弧内は標準偏差を示す。

IV 考察

LINE における自己開示

本研究では、友人関係における LINE での自己開示の深さ、および LINE の効用認知が現代青年の友人関係のあり方により差が見られるのかについて検討を行った。まず、LINE における自己開示の深さがどれくらい行われているのかということを見ていく。「趣味」の平均が 4.91、「困難な経験」が 3.10、「決定的ではない欠点や弱点」が 3.25、そして「否定的な性格や能力」が 3.14 であった。丹羽・丸野（2016）の特にメディアを考慮していない「親しい友人」では、順に、5.16, 3.90, 4.10, 3.49 という結果となっている。比較してみると趣味のような比較的浅い自己開示については行われていると捉えられる。これは、LINE が気軽にコミュニケーションをとれるメディアであるという青年の認識と一致するものであろう。それに対し、趣味以外の相対的に深い自己開示については、丹羽・丸野（2016）よりも低い値を示しており、オフライン状況よりは LINE において深い自己開示が行われていないと考えられる。CMC 研究で言われるような自己開示の行いやすさは LINE では見られないということになる。匿名性が高い状況においては、そのようなメディアの効果が見られるのかもしれないが、LINE のような既知の関係が反映された中での利用においてはメディアの効果は限定的であると思われる。もちろん、丹羽・丸野（2016）と本研究の結果は直接対比できるものではなく、あくまで参考ということにはなる。対面と LINE での自己開示の違いを直接対比する検討が必要である。

現代青年の友人関係のあり方と LINE における自己開示と LINE の効用認知

本研究では、岡田（2007a, 2007b）で示されたような現代青年の友人関係の特徴から得られた類型をもとに LINE の自己開示の深さについて比較を行った。相関分析の結果からは、自己閉鎖と侵入回避が自己開示の抑制に関連していることが示された。クラスター分析の結果からは、岡田（2007b）と同様の類型（「関係回避群」「個別関係群」「群れ指向群」）が見られた。この3群の比較で見ると、深い自己開示については関係回避群が個別関係群や群れ指向群よりも自己開示を LINE において行っていないという結果であった。互いの内面に踏み込むことがなく、傷つけることも傷つけられることも回避しようとする友人関係にあっては、LINE の利用行動にもそれが反映された結果であると考えられる。つまり、LINE というメディアがオフラインにはない独自のコミュニケーションの場を作り出しているということはないということである。オフライン、オンラインの両方で深い自己開示がなされないとすると、自己開示を行うことで得られるソーシャルサポートなどの恩恵（Abeele, Schouten, & Antheunis, 2017; Trepte, Masur, & Scharnow, 2018）が受けにくくなるであろう。友人関係からの回避を示す群は不適応症状を示すという結果（岡田, 2007a）

はそのようなプロセスを反映しているのかもしれない。ただし、趣味のような比較的浅い自己開示については有意な差が見られなかった。関係回避群の青年にとって、LINE を利用する中でそこらにかに自己開示を深められるかという点が1つのハードルになっているようである。

LINE の効用認知についての結果では、利便性について群れ指向群が高い得点を示し、束縛感・不快感では関係回避群が高い得点を示した。友人との円滑な関係を指向する群れ指向群においては、LINE というメディアは利便性という点で有用であると認知されていた。また逆にLINE を使用することにあまり束縛感や不快感を認識していないということであった。これらを総合すると、LINE は個別的な親密な関係を深めるというよりは、気軽に円滑な関係を取り結ぶのに適したものとして、現代青年に取り入れられていると考えられる。この点は、Facebook と WhatsApp という MIM との比較において、MIM の方が「関係性」や「人気」で高い満足が得られているという結果 (Karapanos, Teixeira, & Gouveia, 2016)、あるいは携帯メールとの比較で MIM のコストの低さが評価されているといった結果 (Church & Oliveira, 2013) とも符合すると思われる。ただし、LINE に登録されたともだちの数や参加しているグループ数については、特に群れ指向群で多いといった結果は得られなかった。効用認知がLINE の具体的な利用行動とどのように関係するかはさらに検討する必要がある。

本研究では、自己開示の深さや効用認知、あるいは利用状況に関して性差が存在するのかという点も検討を行った。先行研究を踏まえると女性の方が男性よりも自己開示が行われ、肯定的な効用認知、そしてより活発な利用が見られることが予測された。しかし、全体には性差は見られず、自己開示の深さとLINE の効用認知の一部のみで有意な効果が見られた。そして、自己開示の深さについては、深い自己開示において男性の方が女性よりも高い得点を示していた。この結果は予測と異なり解釈が困難である。オフラインにおける自己開示が女性の方がなされるということがあるのであれば (Dindia & Allen, 1992)、LINE はその代替とはならず、深い自己開示を行うものではなく、あくまで利便性の高いメディアであると女性に位置づけられているのかもしれない。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、現代青年において盛んに用いられているLINE が友人関係の中でどのような位置にあるのかについて、自己開示と効用認知という観点からその一端に触れようというものであった。本研究の結果からは、現代青年はその友人関係の特徴のままにLINE を利用しているという様が見られた。ただし、LINE が友人関係の中でどのような位置づけであり、どのように機能しているのかに対して、本研究における検討には限界があり、より多面的な検討が必要である。第一は、本研究では、自己開示についてLINE のみを取り上げ、検討を行ったことである。LINE がオフラインと異なり独自のコミュニケーションの場をもたらしているのか否かについては、直接的な比較を行うことも必要であろう⁽⁹⁾。また、LINE の利用、そしてコミュニケーションの相手が既知であるこ

とが多いのであれば、オフラインとオンラインが区別されるものではなく、相互に関連するものがあると捉えられる。それらを踏まえてそれぞれのコミュニケーションがどのように捉えられ、どのように展開しているのかについて検討を行うことで、より明確な理解が得られると思われる。第二に、本研究では調査対象を大学生のみとしたが、発達の差異も検討すべき課題である。特に中高生はクラスなどにより対人関係が区分されている状況もあり、友人関係の発達の違い、そしてそこに果たすLINEの役割は異なることも考えられる。最後に、LINEで自己開示を行うことによる友人関係の結果が検討できていない点である。ソーシャルメディアの利用により、既知の対人関係の強化がなされるという知見は複数提出されているが、友人関係のあり方を踏まえて検討を行うことで、LINE利用により何がもたらされるのか、より深く理解されることが期待される。

注

- (1) 本論文は、日本パーソナリティ心理学会 第25回大会において発表した内容を再分析したものである。
- (2) 自己開示は、「自分がどのような人物であるかを他者に言語的に伝える行為」(榎本, 1997)と定義されるものである。
- (3) LINEは現状では様々なサービスが利用できるが、コミュニケーションメディアとしての機能に着目すると、一対一、あるいはグループでのテキストやスタンプ、絵文字、画像、動画などを用いたメッセージの交換、あるいはチャットを可能とする機能を有する。また、音声・ビデオによる通話もできる。さらに、「タイムライン」を利用することでSNSとしての情報発信機能もある。
- (4) LINE以外では、TwitterやInstagram、そしてYouTubeが相対的に多いが、Twitterは10代が66.7%、20代が76.1%、Instagramは10代が58.2%、20代が63.2%、YouTubeは10代が91.5%、20代が92.8%である。
- (5) MIMには世界的に見ると様々なアプリケーションが提供されている。LINEはその1つであるが、他には「WhatsApp」「Wechat」「KakaoTalk」「Facebook Messenger」などがある。(モバイル)メッセージングアプリケーションなどと呼ばれることもある。本論文では特に個々サービスの区別をすることなくMIMに言及している。
- (6) モバイルインスタントメッセージングは、携帯メールと対比されるような利用がなされている。そして携帯メールに比べて、コストに低さや社会的影響力の大きさなどがより頻繁で活発な利用へとつながっている (Church & Oliveira, 2013)。
- (7) ただし、インターネットでのコミュニケーション(あるいはコンピューターを介したコミュニケーション: computer-mediated communication, CMC)と自己開示との関係は、検討するために用いられる手法や測定方法、あるいは自己開示が行われる関係性などを考慮すると必ずしも結果は一樣ではない (Nguyen, Bin, & Campbell, 2012)。
- (8) 岡田 (2007b) の内容が岡田 (2010) に収録されているが、そこでは各クラスターに本論文で用いた命名が行われている。
- (9) 例えば、Knop, Oncü, Penzel, Abele, Brunner, Vorderer, & Wessler (2016) はMIMと対面のグループにおける自己開示状況を比較し、対面での自己開示の優位性を示している。

文献

Abeebe, M. V., Schouten, A. P., & Antheunis, M. L., "Personal, editable, and always accessible: An affordance approach to the relationship between adolescents' mobile messaging behavior and

- their friendship quality.” *Journal of Social and Personal Relationships*, 34(6), 2017, 875–893.
- Altman, I., & Taylor, D. A., *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York; Holt, Rinehart & Winston, 1973.
- 赤坂瑠以・高木秀明「携帯電話のメールによるコミュニケーションと高校生の友人関係における発達の特徴との関連」『パーソナリティ研究』13巻 2005年 269–271.
- 赤坂瑠以・坂元章・高木秀明「青年期中期における携帯メールの使用と、友人関係およびそれに関する意識」『教育メディア研究』14巻 2007年 27–39.
- Church, K., & de Oliveira, R., “What’s up with whatsapp?: Comparing mobile instant messaging behaviors with traditional SMS.” *Proceedings of the 15th International Conference on Human-Computer Interaction with Mobile Devices and Services - MobileHCI '13*, 2013, 352–361.
- Dindia, K., & Allen, M., “Sex Differences in Self-Disclosure: A Meta-Analysis.” *Psychological Bulletin*, 112, 1992, pp. 106–124.
- 榎本博明『自己開示の心理学研究』北大路書房 1997年
- 古谷嘉一郎・坂田桐子「対面、携帯電話、携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果：コミュニケーションのメディアと内容の適合性に注目して」『社会心理学研究』22巻 2006年 72–84.
- 古谷嘉一郎・坂田桐子・高口央「友人関係における親密度と対面・携帯メールの自己開示との関連」『対人社会心理学研究』5号 2005年 pp. 21–29.
- Hall, J. A., & Baym, N. K., “Calling and texting (too much) : Mobile maintenance expectations.” *New Media & Society*, 14(2), 2011, pp. 316–331.
- Hartup, W., & Stevens, N., “Friendship and Adaptation in the Life Course.” *Psychological Bulletin*, 121, 1997, pp. 355–370.
- 五十嵐祐・吉田俊和「大学新入生の携帯メール利用が入学後の孤独感に与える影響」『心理学研究』74巻 2003年 pp. 379–385.
- Igarashi, T., Takai, J., & Yoshida, T., “Gender differences in social network development via mobile phone text messages: A longitudinal study.” *Journal of Social and Personal Relationships*, 22, 2005, pp. 691–713.
- Joinson, A. N., “Self-disclosure in computer-mediated communication: The role of self-awareness and visual anonymity.” *European Journal of Social Psychology*, 31, 2001, pp. 177–192.
- Karapanos, E., Teixeira, P., & Gouveia, R., “Need fulfillment and experiences on social media: A case on Facebook and WhatsApp.” *Computers in Human Behavior*, 55, 2016, pp. 888–897.
- Knop, K., Oncü, J. S., Penzel, J., Abele, T. S., Brunner, T., Vorderer, P., & Wessler, H., “Offline time is quality time. Comparing within-group self-disclosure in mobile messaging applications and face-to-face interactions.” *Computers in Human Behavior*, 55, 2016, pp. 1076–1084.
- 小林哲郎・池田謙一「携帯コミュニケーションがつなぐもの・引き離すもの」池田謙一（編）『インターネット・コミュニティと日常世界』誠信書房 2005年 pp. 67–84.
- 黒川雅幸・吉田俊和「大学新入生におけるLINEネットワークと友人満足感および精神的健康との関連」『実験社会心理学研究』56巻 2016年 pp. 1–13.
- Liu, D., & Yang, C., “Media Niche of Electronic Communication Channels in Friendship: A Meta-Analysis.” *Journal of Computer-Mediated Communication*, 21(6), 2016, pp. 451–466.
- 松井豊 友人関係の機能「青年期における友人関係」斎藤耕二・菊池章夫（編著）『社会化の心理学ハンドブック』川島書店 1990年 pp. 283–296.
- Matuo, Y., Onishi, M., Ando, R., & Sakamoto, A., “Cell-phone use and friendship preference of university students: An investigation of the causal relationship using a panel survey.” *Japanese Journal of Applied Psychology*, 34, 2009, pp. 30–41.

- Nguyen, M., Bin, Y. S., & Campbell, A., "Comparing Online and Offline Self-Disclosure: A Systematic Review." *Cyberpsychology, behavior and social networking*, 15, 2012, pp. 103-111.
- 西村洋一・遠藤健治「高校生のインターネット利用状況についての基礎的検討—対人不安傾向、性別を要因とした分析—」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』2号 2010年 pp. 41-53.
- 丹羽空・丸野俊一「自己開示の深さを測定する尺度の開発」『パーソナリティ研究』18巻 2010年 pp. 196-209.
- 岡田涼「親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築」『教育心理学研究』56巻 2008年 pp. 575-588.
- 岡田努「現代青年の友人関係に関する考察」『青年心理学研究』5巻 1993年 pp. 43-55.
- 岡田努「現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究」『金沢大学文学部論集（行動科学・哲学篇）』25号 2005年 pp. 15-32.
- 岡田努「大学生における友人関係の種類と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について」『パーソナリティ研究』15巻 2007a年 pp. 135-148.
- 岡田努「現代青年の友人関係と自己像・親友像についての発達の研究」『金沢大学文学部論集（行動科学・哲学篇）』27号 2007b年 pp. 17-34.
- 岡田努『青年期の間人関係と自己：現代青年の友人関係と自己の発達』世界思想社 2010年
- 小野寺正巳・河村茂雄「中学生の学級内における自己開示が学級への適応に及ぼす効果に関する研究」『カウンセリング研究』35巻 2002年 pp. 47-56.
- 総務省情報通信政策研究所『平成30年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査』2019年 Retrieved from http://www.soumu.go.jp/main_content/000644168.pdf (2019年10月10日)
- 鈴木英男・遠藤真紀・神野建・松下孝太郎・安岡広志・新島典子「ソーシャルメディアにおけるプライバシーリスクの盲点：リスク軽減に向けた論点整理」『東京情報大学研究論集』18号 2015年 pp. 1-15.
- Tidwell, L. C. & Walther, J. B., "Computer-mediated communication effects on disclosure, impressions, and interpersonal evaluations. Getting to know one another a bit at a time." *Human Communication Research*, 28, 2002, pp. 317-348.
- 時岡良太・佐藤映・児玉夏枝・田附紘平・竹中悠香・松波美里, …桑原知子「高校生のLINEでのやりとりに対する認知に現代青年の友人関係特徴が及ぼす影響」『パーソナリティ研究』26巻 2017年 pp. 76-88.
- Trepte, S., Masur, P. K., & Scharnow, M., "Mutual friends' social support and self-disclosure in face-to-face and instant messenger communication." *The Journal of Social Psychology*, 158(4), 2018, pp. 430-445.
- Waterloo, S. F., Baumgartner, S. E., Peter, J., & Valkenburg, P. M., "Norms of online expressions of emotion: Comparing Facebook, Twitter, Instagram, and WhatsApp." *New Media & Society*, 20(5), 2018, pp. 1813-1831.

The Use of LINE among Japanese College Students

Youichi NISHIMURA

Abstract

This study investigated how adolescents used the mobile instant messenger LINE in relation to the depth of self-disclosure and perceived utility. Among multiple friendship patterns, this study focused on the extent to which adolescents with a disposition toward the avoidance of friendship disclosed themselves through LINE. A web survey was conducted with Japanese college students ($n = 302$). The results of a cluster analysis of the friendship scale indicated that contemporary adolescents' friendship patterns could be divided into three categories: adolescents who avoided emotionally close relationships, adolescents who simply tried to be together with their friends, and adolescents with individualistic and close relationships. A comparison of the depth of self-disclosure in LINE and perceived utility among three groups showed that adolescents with a disposition toward friendship avoidance did not disclose themselves as deeply in LINE and perceived LINE as more restrictive. These results demonstrate that communication using LINE does not enable a unique field of conversation for adolescents, and it strongly reflects offline relationships.

Key words: LINE, depth of self-disclosure, friendship, perceived utility of LINE